呪い屋繁盛記

黒辺あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪い屋繁盛記

【Ｎコード】
Ｎ４７０２Ｒ

【作者名】
黒辺あゆみ

【あらすじ】
南国シャンディラの王都ディラの片隅におんぼろな店があった。その店の看板には「呪い屋」とある。そのいかにも怪しげな店の店主は、意外な人物であった。
異世界ファンタジーで、コメディなカンジのお話です。

その1

一週間前に小麦が尽きた。そして今、芋も尽きた。
食料庫には何もない、空っぽだ。
したがって、これから食べるものが何もないのだ。

きゅるきゅるきゅる
切ない音がする。どこからするかというと、サイファの腹から。サイファは音をたてて自己主張する腹を慰めることを、すでに諦めていた。どんなに慰めたところで、入るものがなければ音は止まないのだ。
　サイファはムダに長い黒髪を広げたまま、机に顔を伏せていた。コレがサイファにとって一番エネルギーが要らない体勢だからだ。だが、髪をもっさりと広げてピクリとも動かない様子は、まるで死体のようである。が、それを指摘する人間はこの場には居らず、居るのはサイファの頭の上でだらしなく腹を見せているハムスターだけだ。

ああ、このままひっそりと、誰にも知られずにここで死ぬのだわ・・・。

大げさのようで、事実深刻な超局地的食糧難ゆえ、死にかけている少女一人とハムスター一匹であった。

ここはシャンディラ国王都ディラの中央大通り、から六つほと離れた小さな路地の果てにある、傾きかけた家の前。砂埃にまみれた看板が玄関に掛けてあるところを見ると、どうやら何かの店らしい。

砂埃の上から看板を読んでみると、それにはこう書かれてあった。

こちら呪い屋

殺したいほど憎い方から、ちょっと嫌がらせをしたい方まで、いろいろなバリエーションの呪いをご用意しています。うっかり殺してしまう前に、どうぞご相談ください。あなたの満足する結果をお約束します。

いささか物騒な看板である。なるほど、近所から警戒され、苦情がくるのもわかるかもしれない、と看板の前でそれを読み上げた男、トールは思った。

トールは町の警邏隊の制服を着込んでおり、しかも肩には隊長の証拠である二本の朱色のラインが入っていた。隊長であるトールがどうしてこんな町のへんぴなところに一人でいるかというと。隊員の誰もが、近所からの苦情が四六時中絶えない、得体の知れない「呪い屋」というものを怖がったからである。トールとて、見たことのない「呪い」というものは怖い。この国には「魔術」はあっても、「呪い」はない。それは海を越えたはるか北の国で栄えているという文化である。

「大丈夫だ。お守りももらったし、第一呪いなんてまがい物かもしれないじゃないか。どうして北の国の呪いがわが国に入っているんだ。しかもこんな町の外れに。大丈夫大丈夫・・・」

トールは呪文のように、同じ台詞を何度も、さっきからずっと繰り返していた。たとえ隊長といえども、剣の腕はそれなりに自身はあっても、怖いものは怖いのだ。仕方ないではないか。しかしいつまでもここで呪文を唱えているわけにはいかず、覚悟を決めたように一つ深呼吸をすると、大きく右手を振りかぶった。そしてノックを数回。

「こちらに店主はおられるか。警邏隊の者だ」

意識して穏やかに、間違っても声が震えないように注意して、トー

ルは室内に声を掛ける。が、返事はない。
「いないのか？」
やはり返事はない。何だ留守か、とがっくりしたようなホッとしたような心地で、念のためにと入り口の扉を開けてみる。すると。
「・・・開いた」
なんということだろう。これで開かなかったら「いませんでした」と言い訳をして帰れたというのに。やはりがっくりとして肩を落とし、トールは入り口の扉をくぐった。
「失礼するぞ、て、店主はいるか」
少々どもってしまったが気にしない。単なる鍵の閉め忘れかもしれないのだ。
　店内に入ると、まずは薬草の匂いがした。それもほのかに、なんていう生易しいものではない。鼻をつまみたくなるくらいに強力な刺激臭だ。
「なんだ、どうやったらこんな匂いができるんだ・・・」
こんな強烈な環境に生き物がいるわけがない。そう結論付けて引き返そうとしたとき、視界の片隅で何かが動いた。
「・・・？」
恐る恐る動いた物体を探すと、そこには一匹の茶色いハムスターがいた。黒い物体の上から転がり落ちたらしい。こんな強烈な匂いの中で生息できるとは、なんと生命力の強いハムスターだろうか。いや、それとも息も絶え絶えだから転がり落ちたのかもしれない。そうなると、例えハムスターであろうとも救出するのが、警邏隊の使命なような気がしてきた。そうだとも、ハムスターといえども立派な生命だ。
　ハムスター救出のため黒い物体に近付き、それをよくよく観察する。もっさりと広がっている黒を、トールは布か何かだと思っていたのだが、どうやら違うらしいことに気付いた。それは、どうやら髪の毛だ。この辺りでは黒い髪というのは珍しいが、それでも旅の商人などで黒髪を見かけることがたまにある。

それはさておき、どうやらこれは人間らしいことが判明した。店主か？と一瞬考えたが、髪から下の身体を見るからに、十二、三歳くらいの子供に見えた。服の隙間から覗く肌も色白だ。この国の民は金髪に褐色の肌がほとんどなので、地元の子供ではないだろう。何故こんなところに子供がいるのだろうかといぶかしむが、とりあえず声を掛けた。

「おい、このようなところで子供が何をしておる」

が、子供はピクリとも動かなかった。

「おい、寝ているのか？」

やはり反応がない。ハムスター同様、この強烈な匂いの被害者かもしれないと思い立ち、トールは意識をしっかりさせようと肩を揺さぶった。

「おい、気をしっかり持て！今に助けてやるから」

すると、かすかに子供が動いた。

「・・・」

小さく、子供が何事か呟いた。トールがよくよく耳を澄ませると。

「・・・ごはん・・・」

きゅるきゅるきゅる、と空腹を知らせる音が響いた。

トールはとりあえずパンを買ってきて与えてみた。すると一人と一匹は猛烈な勢いでそれを食べ始めた。水とパンしかないのだが、それでも一心不乱に食べている。どうやら余りの空腹のために倒れていたらしかった。ここはまがりなりにも王都である。日雇いの工夫でもここまで飢えてはいないだろうとトールは思う。しばし、一人と一匹の食べる音だけが店内に響いた。

「あー、生きかえったぁ！」

少女がようやく顔を上げた。ちなみにもっさり黒髪な子供の性別は女であるらしかった。

「お金がなくって何にも買えないから、このまま誰にも気付かれず

に餓死するかとホンキで思ったわ」
満足気につい先ほどまでの己の状況をのたまう少女の前の皿の上では、ハムスターがぽてんと突き出た腹を上にして寝ていた。そして時折腹を手でかいている。なんともオヤジくさいハムスターである。
「・・・それは危うかったな」
ちなみに今は店内の扉や窓を全て開け放ち、部屋を換気している最中だ。あのような殺人的な臭いの中でパンを食べるのは健康によくないと思ったのだが、その代わり近所の住人から苦情が出ているだろう。後で謝っておかねばなるまい。
「パンを買ってくれた親切なおにーさん、特別に相談料はまけてあげるわ」
「は？」
「わざわざここまで来たってことは、お仕事の話でしょう？」
にっこりと笑う少女に、トールは思考がしばし追いつかない。いや待て、この少女の口ぶりからすると。
「おい、この店の店主は？」
「はぁい、私が店主のサイファです」
そう名乗った少女は、よく見ると、トールが今まで見たことのない赤い瞳をしていた。

その2

そもそも、トールはここまで仕事で来ているのだ。断じて怪しげな呪いの世話になるためではない。それなのに。
「ねぇねぇ、これなんかどう？嫌いな人をカエルにかえちゃう呪いとか。けっこう人気があってさ、こないだ買って行った人がいるんだけど」
「いや、残念だが・・・」
こんな怪しげな店にも、どうやら客がくるらしい。はっきり言って驚きだ。
「なに？好みじゃないの？だったらこれはどうかしら。相手の背中が痒くなる呪い。人目を気にする伊達男とかへの嫌がらせにぴったりよ」
「だから待て」
「じゃああとねぇ」
「待てというに！」
まだまだ呪いを紹介したそうな少女、サイファをトールは大声で黙らせる。このまま聞いているとうっかり興味を持ってしまいそうになる。
「俺は客ではない。王都警邏隊第二隊の隊長で、トールという」
ようやく黙ったサイファは、とたんにがっかりした顔をする。
「なぁんだお客じゃないの。警邏隊のおえらいさんが、こんな僻地に何か用？」
「用事というか・・・。少々お前に尋ねたいことがあるのだが」
「ふーん、だれかウチの苦情を言ってきた？」
どうやら苦情を言われているという自覚はあるらしい。
「いや、そういうのとは関係なくもないが、そういう話ではない」
「ビミョーな言い回しだけど、結局言われているんでしょ？苦情」
「まあ、そうだが」

隠すほどのことではないので、トールは正直に答えておく。
「で、どんな苦情？夜中に変な儀式をやっているとか？変な臭いを撒き散らすなとか？あとハムスターが食料を食い荒らしたとか？」
「そんなことを日常的にやっているのか」
苦情の具体的内容は、トールは聞かずに出てきたのだが。二番目の変な臭いというのは、つい今しがた身をもって体験したところだ。だが、ハムスターの食料荒らしとは？
「お前は自分のペットのしつけもつけられないのか？」
よそさまの食料に手を出させるとは、飼い主失格である。トールは一人の大人として説教をする。しかしサイファが猛烈に抗議をしてきた。
「こんなの、ウチのペットなんて冗談じゃないわ。しょうがないから店の番頭として置いてあげているのよ」
「・・・番頭？」
ハムスターが？
「そう、ウチの店の番頭ハムスターのプッチ」
「クエッ！」
自分のことを言われているのを察したのか、番頭ハムスターとやらは急に起き上がって鳴いた。だが、体中パンくずまみれで見上げられても可愛くない。しかも鳴き方が少々おかしい。トールはハムスターが鳴くところを初めて見た気がする。
「プッチ、あんたパンくずをあたりに撒き散らさないでよね。で、尋ねたいことって？」
サイファが急に話を修正してきたので、トールは一瞬何の話かわからなかったが、すぐに己の仕事を思い出した。
「そうだ、お前に尋ねたいことがあってな」
「だから何？ズバッと聞いちゃいなさいよ」
もどかしそうに言うサイファ。が、トールとしては手順というものがある。
「いや、・・・できれば警邏隊詰め所まで同行してほしいのだが」

そうお願いして、相手が大人しくついてきたことはないのだが。
「詰め所までついていけば食べ物出る？」
「は・・・？」
相手にぐずられることは予想していたが、思わぬ切り替えしにトールは間抜けな声を上げた。
「晩御飯を食べさせてもらえるなら、行ってやってもいいわ」
ちなみに今の時刻は正午前。どうやらサイファは昼食と夕食を警邏隊にたかろうとしているらしい。だが、トールとしてはそんなことは問題ないことだった。
「食事くらいは不自由させないつもりだぞ」
「行く！」
即答するサイファの頭の上に、パンくずまみれのハムスターが飛び乗った。「自分をおいていくな」という自己主張らしい。が、頭の上がパンくずだらけになったサイファが嫌そうな顔をしていた。

「で、連れてきたんですか」
「・・・仕方がなかったんだ」
己の副官にあきれたようにため息をつかれ、トールはむくれたように言い訳をした。
警邏隊第二隊副隊長のリオルは、所用があって王宮に上がっていたのだが、そんな己の知らぬ間にこんな騒ぎになっていようとは。
「だいたい、お前がいないから俺が独りで行くハメになったんだぞ」
トールとしても、どうしてこんなことになったのかさっぱりわからないと言いたいらしい。が、八つ当たりをされたリオルはにっこり笑顔で。
「ほぉう。王宮に上がるのは嫌だとゴネてくださったどこぞの隊長の代理で報告の書類を持って、聞きたくもないジジイどもの説教を聴いてきた、ワタクシが全て悪いとおっしゃるので？」
「・・・俺が悪かったです」

リオルに迫力負けしたトールは素直に謝った。そして二人はちらりと横を見る。
　今トールとリオルがいる部屋の片隅で、少女とハムスターが夕食を食べているところだった。トールがパンを買い与えたときと違って、今度は行儀よく、しずしずと食べている。おそらく、昼もここで食べている（パンを食べた後だというのに、しっかりと食べた）ので、さほど腹を空かせていないのだろう。
「犯人として捕らえに行った相手を、詰め所に招いてどうするんですか。しかも好待遇で」
「いやぁ、牢屋にいても食事は出すんだし、一緒かなぁと」
「牢屋の食事は薄粥です、パンに肉やサラダはつきません」
トールの失態に、リオルはどこまでも冷たい。
「仕方ないだろう。うわさの呪い屋の店主があんな子供だなんて。子供に縄を打って大通りを抜けてきたら、俺は確実に子供虐待だと言われてたぞ」
その言い分は認めてやってもいいかもしれない。リオルとしても、呪い屋をやっているのがあんな少女だとは知らなかった。てっきり年寄りかと考えていたのだが。
「だとしても、例の事件の犯人だという情報も上がっているんです。調べないわけにはいかないでしょう」
「それはわかっているんだよなぁ。でもなぁ・・・」
子供だと思うとやりにくい、トールがぼやく。
　ちなみに今は、監視も兼ねているため、トールとリオルは少女とハムスターから離れるわけにはいかず、一人と一匹に聞こえないようにボソボソと会話していた。が、会話に神経を集中しすぎて、監視がおろそかになっていたらしい。二人は背後に立った人影に、うかつながら全く気付かなかった。
「オトナが二人で、なんのたくらみごと？」

その3

今から一月ほど前、王都のさる貴族の屋敷で働いていた少年が行方知れずになった。主から命じられて使いに出たまま、帰ってこなかったのだ。少年は遠い土地から働きに出ていたらしく、故郷が恋しくなって逃げ出したのだろう、と屋敷の者は言っていた。

それから三日後、同じく王都の貴族の屋敷から青年が行方知れずになった。こちらは使いに出ていたわけではなく、屋敷の中から忽然と姿を消したのだ。屋敷の主曰く、青年は身寄りがないらしく、どこにも行くあてがあるはずがないとのこと。警邏隊へ捜索人として届けが出されたが、未だ青年の行方はつかめていない。

それから十日後。王都の商家の家の使用人の少女が行方知れずになった。客の家に届けものをした帰りに、行方がわからなくなった。人攫いにあったのではないか、とただ今犯人と少女の行方を追っている。

そして、今から二日前、王都の貴族の屋敷から、主が行方知れずになった。貴族の行方不明事件として、王宮から直々に捜索の命令が出された。警邏隊は全隊を挙げて捜索に当たっている。街の者に聞き込んだところ、今挙げたような行方不明事件が起こっていることが明らかとなり、この件は「連続誘拐事件」とされたのだった。

「ふーん。誘拐って言ってもさ、身代金の要求とかあったの？」

サイファは事件のあらましを聞いて、首を傾げている。

「いや？そんなことは聞いていないな」

「隊長、正直に答えることはないと思いますが」

あっさり答えるトールに、横から釘を刺すリオル。

「じゃあなんで誘拐事件なんて言っているのよ」

「知らん。大臣が勝手に言い出したことだ」

少々投げやりに言うトール。

「変なの。ま、わたしには関係ない話だけどね」

サイファが食後のお茶を飲み終え、「ごちそうさまでした」と食事終了のあいさつをすると、座っていた席から立ち上がった。そして、ハムスターを頭に乗せてスタスタと部屋を出ていく。
「どうした？トイレは反対だぞ」
トールが親切心で指摘してやると、サイファは顔だけこちらに向ける。
「用事は済んだみたいだから、店に帰るわ」
「・・・は？」
じゃあさようなら、とひらひらと手をふるサイファを、リオルが素早く捕獲する。
「待ちなさい。一体何の用事が済んだというのですか」
リオルが尋ねると、サイファはまばたきを数回して、
「ご飯を食べ終わったし、話もしたじゃない。私はもうすることないわ」
あっけらかんとしてそう答える様子に、リオルは頭痛がする気がした。
　警邏隊の詰め所は、いつから食堂になったんだ。
「あなたにはなくても、こちらにはまだ用事があるんです」
とにかくこのまま帰すわけにはいかないとばかりに、強い口調でリオルが言うと。
「何がぁ？あ！もしかして明日もご飯をもらいに来ていいの？」
「・・・そうではなく」
両者、根本的なところで、話がかみ合っていない様子である。
「あー、待て待て。リオルもそうムキになるな」
このまま会話を続けていても、リオルに説得は無理そうである。そう判断したトールはリオルを視線で下がらせる。リオルは眉をしかめてサイファを捕獲していた手を離した。
　代わりにトールがサイファの前にひざをつくと、目線を合わせる。
「お嬢ちゃん、明日もここで食事を出してやろう」
「ホント！？」

どうやら食費に相当困っていたらしく、食事を出すという台詞にサイファが目を輝かせた。
「その代わり、しばらくここに泊まってくれないか？そうしたら、泊まっている間はずっと食事を出してやる」
「・・・ずっと・・・」
どうやら心が揺れている様子だ。
「デザートもつけてやろう」
サイファの頭から、ずりっとハムスターが落ちかけた。ハムスターをよくよく見ると、ものほしそうによだれをたらしている。それを察知したのか、サイファが素早くハムスターをつまみあげる。
「いいわ、そこまで言うのならば泊まってあげるわ」
つんとあごをあげて、偉そうな態度のサイファに、トールはため息をついた。
「・・・隊長」
後ろから、リオルが小声で抗議してきた。
「仕方ない、逃げられるよりはいいだろう」
「そうですが、何か納得がいきません」
「納得いかなくて結構」
議論はおしまいだとばかりにリオルとの会話を切り上げ、トールはこれからの準備にとりかかるのだった。

「すまんが、詰め所には部屋は牢屋しかないんでね」
詰め所地下にある、湿っぽい牢屋の前でトールが軽く謝る。詰め所で泊まるとなれば、宿直の者が使う部屋以外には牢屋しかない。ゆえにここがしばらくサイファに寝泊りしてもらう場所だ。サイファが文句を言うかと思えば、意外にもそうでもなく、牢屋内をキョロキョロ見回したかと思えば。
「まあいいわ。隙間風で家がミシミシうるさいこともないと思えば」
そんな感想を漏らして、ハムスターを床に放り捨てた。ハムスター

は一回転して着地すると、走り回って牢屋内を探検しているようだった。それを横目に見ながら、サイファは隅にある布団に寝転ぶ。
「一応布団は干してあるみたいね」
「毎日外で虫干しさせているぞ」
「あっそ」
その答えに安心したのか、サイファは布団に包まった。
「朝ごはんの時間になったら起こしてね～♪」
「・・・はいよ」
のん気な牢屋の住人に、トールは脱力してしまうのだった。

その1

次の日。
　トールはいつもよりだいぶ早い早朝に詰め所に現れた。理由はもちろん、牢屋に宿泊しているサイファの様子が心配だったからだ。
「あの呪い屋はどうしている？」
リオルに尋ねると、朝でも眠そうな様子を見せずに答える。
「朝から食欲旺盛でしたよ」
少なくとも、牢に入れられて食事が喉を通らない、ということはないらしい。
「・・・そうか」
まあ病気になってもらうよりはいいかもしれない、とトールは良い方に考えることにする。
「それよりも、朝から第一隊の隊長どのから呼び出しがかけられていますよ」
「こんな朝からか？」
「ええ、朝一番に伝令が来ました」
第一隊はトールが率いる第二隊よりも立場が上であり、その隊長はトールにとっては上司に当たる。トールはこの第一隊長が苦手であった。
「仕方ない、行ってくるか」
「早く行かないと、厭味を言われますよ」
嫌なことは早く済ませろとリオルからも急かされ、トールは第一隊の詰め所へと向かうことにした。

「この件の捜査は、我ら第一隊が行うことになった。第二隊は捜査から手を引くように」
第一隊長である男はトールの顔を見るなり、挨拶もなしにそう言った。トールは何の話だかとっさにわからなかった。

「この件と申しますと、第二隊で捜査中の誘拐事件ですか？」
「そうだ。第二隊には手に余る事件であると、上からの直々のお言葉だ」
第一隊長はにやり、と口元にいやらしい笑みを浮かべている。
「まあ、どうせ捜査に進展はない様子だからな。大人しく街の巡回でもしているといい。その程度の仕事がお似合いだというものだ」
「・・・は・・・」
上機嫌に高笑いする第一隊長に、トールは表情を読まれぬように深く頭を下げる。
「用はそれだけだ。私は忙しいのだ」
犬でも追い払うかのように、第一隊長は手を振って見せた。トールは何も言わず、隊長室から出た。扉を閉めると、深く息を吐く。
気にすることはない、いつものことではないか。
トールは自分に言い聞かせるように心の中で呟く。第一隊長に目の敵にされ、ささいなことから嫌がらせをされる。彼はトールが嫌いなのだ。トールの手柄を横取りするのはいつものこと。今回も呪い屋を捕まえたことを耳にしたのだろう。腹は立つが男は一応トールの上司であるので文句も言えない。仕事が楽になったと思うことにしよう。
朝から疲れた足取りで、トールは第二隊の詰め所へと戻って行くのだった。

「というわけで放免だ。帰っていいぞ」
第二隊詰め所へと戻ると、何故か隊長室でお茶を飲んでいたサイファに、トールは解き放ちを告げた。
「えぇえ！？帰んなきゃいけないの！？」
しかしサイファは、解き放ちになったことに対して、盛大に文句を言った。ちなみにハムスターはこちらの会話を気にもかけず、パンくずを撒き散らしながら食事中であった。
「私ここで一週間は粘ろうと思ってたのに！今日食べるのにも困っ

ているいたいけな少女を、警邏隊は放り出すっていうの！？」
一週間も居座ろうとしていたらしい。普通宿無しだって居座ってせいぜい三日であるというのに。しかし、帰っても食料がないということはトールだって知っていた。
「分かった、一週間分の食料を俺が寄付してやろう。だからとりあえず帰れ」
しばし二人の間で交渉は続いたものの、結局この妥協案で合意に至ったのである。

昼下がり、トールはのんびりとお茶を飲んでいた。
　大きな事件を第一隊に持っていかれた形になったが、こういうふうにのんびりするのもいいものだ。何も大きな事件だけが仕事ではない。昼からはひさしぶりに街の見回りに行くことにしよう、とトールは考える。そのとき、
「なぁぁあにぐずぐすしてんのよアンタたちはぁあ！！」
朝食を腹いっぱい平らげてから帰ったはずのサイファが、いきなり怒鳴り込んできた。

その2

「立ち退き勧告。三日以内にこの住居を明け渡すこと」
サイファの店には、確かにそんな張り紙がしてあった。

あれからサイファに何とか帰ってもらって、トールは一安心していた。しかし、警邏隊の詰め所にサイファはそう時間を置かずに再び現れた。なにやら騒ぎ立てるのだが、サイファは興奮のあまり話しの内容がとびとびで、トールにはいまいちうまく飲み込めない。それで、サイファと共に店までやってきたのだが。
「どういうこと!?私は無罪放免なんでしょ!?」
どうして立ち退きなんて話になるのかと、サイファが唾を飛ばしながらトールを問い詰める。
「あー、そうだなぁ・・・」
無罪放免だったわけではないのだが、ここで知らぬフリをしてもサイファはしつこく詰め所まで来そうな気がした。
仕方なく、サイファと一緒に話を聞きに行った大家曰く、
「犯罪者に家を貸すわけにはいかん!」
だそうだ。
「濡れ衣のせいで生活を失うのよおぉ!」
地面にベシャッとつぶれるように座り込み、さめざめと泣くサイファ。まあ確かに、王都の端とも言っていい破格な家賃のこの場所から追い出されたら、店を構えるなんて出来ないであろう。
「災難だったな」
サイファの勢いに飲まれ、ここまで引っ張ってこられたトールは、そう慰めてやる。大家と交渉しようにも、そもそも大家は呪い屋などという商売を嫌っていたので、これ幸いと追い出そうという考えであったので、交渉は無理であろう。これから先のことで、トールにできることはないと思われた。

「気を落とさずにがんばれ」
トールは感情のこもっていない声で慰める。正直に言えば、トールだって「呪い屋」などという怪しげなものに係わり合いになりたくないのだ。あまり懇意にして、おかしな噂が流されたらたまったものではない。
　そういうわけでさっさと帰ろうとしたトールの上着の端を、サイファの手がむんずとつかんだ。
「探すのよ」
「は？」
サイファの低い呟きに、トールは間の抜けた声を上げた。だがそんなトールの反応をサイファは無視して続ける。
「私が犯罪者じゃないって証拠を探すのよ。犯人がちゃんと捕まればいいのよ」
「それはそうだな」
至極もっともな理論だが、捜査から外されたトールたち第二隊にはもはや関係のない話である。せいぜい第一隊の活躍を期待するばかりである。
　しかし、サイファはそんなトールの中間管理職としての現実はどうでもいいようであった。
「というわけで行くわよ」
トールの上着の端を握ったまま、立ち上がるサイファ。
「どこにだ」
サイファの言動についていけず、戸惑うばかりのトールに、サイファは人差し指を突きつけた。
「もちろん、誘拐現場よ！」

その3

一人目の行方不明者は、さる貴族の屋敷で働いていたコメットという名の少年であった。

トールはサイファの勢いを止められず、一人目の行方不明者の周辺聞き込みをすることになった。

本来ならばトールたち第二隊は手を引いているはずの事件である。これがばれたら叱責ではすまないところであろう。そらの事情を配慮して、トールは一旦帰って私服に着替えていた。

そういった事情ゆえに、堂々と屋敷の表玄関を訪ねるわけにはいかない。そこで、トールとサイファは裏玄関から出入りしている屋敷の関係者に聞き込むことにした。

「すまんが、少々尋ねたいことがあるのだが」

「あらいい男だね、なんだい？」

トールに声を掛けられた四十代半ばの女性が、にこやかに微笑む。しかし、コメットという人物について尋ねると、とたんに屋敷の使用人たちは表情を険しくした。

「あんなやつ、いなくなって清々するね！」

ああ嫌だ嫌だと呟きながら、女性はトールたちから遠ざかっていった。

「コメットは嫌われてたのか？」

激しい拒絶反応に、トールは首を傾げる。

「もっと他の人に聞いてみなきゃ分からないわ」

そう言うサイファに、トールはそれもそうかと頷いた。

しかし、

「ろくな仕事もしやがらなかったから、困ることなんてなんにもないね」

「名前も聞きたくないね」
等々、他の者たちも嫌悪も露わに言うと、怒って屋敷に入っていった。
聞き込んだ使用人から聞こえてくる罵声の数々に、トールも腰が引き気味である。
「ずいぶんと嫌われていたんだな」
まだ聞き込み一件目だというのに、すでに疲れた様子のトール。その様子を、サイファがいぶかしんだ。
「何よ、もう聞き込みしてるんじゃないの？」
「最後の事件から順に聞き込んだから、まだだ」
最後の事件の聞き込みの早い時点でサイファの存在が上がってきたのだ。なのでそれ以上の聞き込みはされていないのであった。
「・・・あっそ」
サイファは何か言いたげであったが、結局口をつぐんだ。手抜きだと言いたいのであろう。事実、トールもそう思う。
「役人だって色々あるんだよ」
「ほー」
そんなため息交じりのトールの言い訳を、サイファは半眼で流した。
「それで、コメットを捜しているのは、屋敷の主だけか。冷たい使用人だな」
結局屋敷で手に入れた情報は、コメットが使用人たちから嫌われていたということだけであった。この調子で、使用人全員の罵声を聞くのも気が滅入る話である。
「これ以上はしょうがないな。次にいくか」
トールが一件目の誘拐現場での聞き込みを切り上げようとしたとき。
「ねえ、そのコメットっていう子はどんな顔だったの？」
サイファが尋ねた
「お前な、子って言ってもお前よりも年上だぞ」
「いいから、嫌われるくらいにブサイクだったの？それとも嫉妬されるくらいに綺麗とか」

サイファはコメットの徹底した嫌われっぷりに疑問に思ったらしい。
「性格悪いってだけで、あんなに嫌われるかしら」
サイファの疑問も最もだと考え、トールは持っていた調書を探した。
「えー、あった。コメットの容姿について」
さすがにこれについては調べてあった。トールは調書をぺらりとめくる。
「銀の髪に青い目、白い肌。異国の人間だったんだな」
この国の人間はたいてい、金の髪に褐色の肌である。
「この国じゃあ派手な色でしょうね」
あの罵声の数々は、異国の人間に対しての拒絶だろうか？

その4

次の行方不明者は、貴族の屋敷で働くアーディという青年だった。
この青年は主の身の回りの雑事をすることが仕事だったようである。
屋敷から出ることがあまりなかったようである。
「ふーん、このアーディはこの国の人なのね」
「そのようだな、特に目立つ特徴はないようだ」
調書で確認しつつ、屋敷の裏玄関で聞き込みをする。
　すると。
「あいつのことは話したくないね」
「わざわざ探してやることなんかないよ」
コメットの時同様に、屋敷の使用人からはアーディを心配する声は聞かれなかった。
　二人がさらに三人目の行方不明のシリルという名の少女を訪ねて商家へ行くと、そこでも同じ反応が返ってきた。
「何なんでしょうね、これは」
サイファが首をひねるのも無理は無い。トールとて怪しいと思うのだから。
「シリルもこの国の者だな」
トールが調書に目を通していると。
「もし、シリルさんのことをお調べですか？」
トールは背後から声をかけられた。振り向いてみると、そこには紫の衣を纏った男が立っていた。
「なに、あんた」
不審人物を見るような目つきのサイファを、トールはたしなめる。
「ばか、魔術師だ」
この国では、紫の衣を纏うのは魔術師だと決まっていた。魔術師とは、不思議の技を研究すると共に、薬を調合したりして病人を診るのが仕事である。民から敬われる存在であった。

「そういう魔術師殿こそ、この商家へ御用ですか？」
トールが逆に尋ねると、
「ええ、こちらに貴重な薬の類を取り寄せていただいていますので」
それを受け取りに来たのだと魔術師は答えた。
「あなたはシリルさんをご存知なのですか？」
この質問に、魔術師は悲しそうな顔をした。
「ええ、気の毒な娘です」
初めて行方不明者を擁護する言葉を聞けたので、トールは思わず魔術師の顔をじっと見つめてしまった。それに気付いた魔術師は一瞬表情を硬くする。
「使いに出て人攫いに会うとは、どのような娘でも気の毒でしょうに」
「そうですか」
「ええそうです。では」
魔術師はそそくさとその場を立ち去った。
トールが魔術師の後ろ姿を、なんとなく見送っていると。
「どうしてあの魔術師、ここへいたのかしら」
サイファが呟いた。
「だから、薬を取りにきたんだろう？」
「だったら、表玄関に行けばいいじゃないの。立派なお客さんなんだから」
確かに、今二人がいるのは裏玄関、使用人が使う場所だ。魔術師のような立派な客が、裏玄関を使うことなどないであろう。
「てことは、何か後ろ暗い薬だったりするのか？」
裏玄関に来る理由を、トールはそれ以外に考え付かない。
そんなトールを、サイファは小馬鹿にするように見る。
「それもあるかもしれないけど。もしかすると私たちが目当てで近付いたのかもしれないってことよ」

結局、その日はそこで捜索が打ち切りとなった。
「仕事をしてください」とリオルに呼び戻されたからである。それにサイファも着いていき、しっかりと食事をたかって帰っていった。サイファは絶対警邏隊の隊舎を食堂か何かと勘違いをしているにちがいない、とトールは思う。
そしてその夜。トールは街の夜回りをしていた。隊長とはいえ、街の様子を実際に目で見ることは大切なことである。
「何もないな、今日は帰るか」
揉め事などが起こらない、平和な夜のようであった。このときまでは。
隊舎に戻る道の途中に、男が一人立っていた。
道の真ん中に、こちらを向いて立っているので、避けていくことは出来るだろうが、不審なことこの上ない。何をしているのか尋ねるべきであろうか。しかし昼間の往来とは違って、通りのない夜道に立っているのは自由な気がする。誰かに迷惑をかけているわけでもない。そんなわけで、トールはこの男を放っておくことにした。
道の端に寄って、男を避けて行こうとすると。
「もうこれ以上調べるな」
男とすれ違う瞬間、男がトールに告げる。
「は？」
トールが何のことだと言おうとした瞬間、首筋に強い衝撃を受けた。
そこで、トールの意識は途切れた。

その1

「なぁんだ、怪我して休んでるって聞いたから、どんな大怪我かと思ったら」
警邏隊の隊舎に朝食を食べに来たらしいサイファが、トールの部屋を覗きにきた。
「頭を打っているから、今日一日休むようにリオルに言われているんだよ」
トールは仕方ないだろう、とサイファに返事をする。
頭に白い包帯を巻いたトールが、ベッドに上半身を起こした状態で座っていた。頭を打った以外には、特に外傷はない。あくまで念のための休養である。
サイファは部屋に入ってくると、食事の載ったトレイを持っていた。トールの食事を運んできたのかと思いきや、確実に二人前の食事がトレイに載っている。
「お前、隊舎を食堂と勘違いしていないか」
トールの部屋で堂々と朝食を食べようというサイファに、トールは呆れる。
しかし、サイファは胸を張って反論する。
「とんでもないわ、食堂だったらお金がいるじゃないの」
「なお悪い」
少しも悪びれないサイファに、トールはむしろ感心する。なんとも図太い神経をしている。
そんなこんなで二人で朝食を食べながら、トールは昨夜の件をサイファに話して聞かせた。
「警邏隊の隊長のくせにニブイんじゃないの？」
あっけなく昏倒させられたことに、サイファはイヤミを言う。トールとしても、それを言われては何も言えないところである。
「それにしたって、昨日ちょっと調べただけでこんな反応されちゃ

あ、この事件はアヤしいですよって主張しているようなもんじゃないのさ」
口の中でパンをもぐもぐさせながら、サイファが言う。
「あからさまな嫌がらせではあるな」
サイファの感想は、トールも同じように思ったことだった。なんというか、つたないやり方である。
「この美少年連続誘拐事件って、目的は何なのかしらね」
唐突にサイファはそんなことを言う。
「美少年連続誘拐事件？」
初めて聞いた事件名に、トールは眉を寄せる。
「誘拐された人たちって、近所で評判の美少年らしいわよ。露天のおばちゃんが言ってたわ」
どうやらトールと別れたあと、サイファはあのあたりで聞き込みをしたらしい。それにしたってこの事件名は納得いかない。
「ちょっと待て、最後に誘拐された貴族は美少年じゃないぞ。歳をくったオッサンだ」
「それ以外は美少年よ」
オッサンは除外するらしい。
「美少年を集めて何するのかしら。周りにはべらしてうはうは？」
「・・・まぁ、ソレが妥当な線だろうな」
サイファのような幼い少女に「うはうは」なんぞと言われると、トールとしては微妙な気持ちになる。
「だったら、犯人は美少年好きなマダムとか？」
「三文芝居の見すぎだ」
サイファに付き合っていては食事が冷めるとばかりに、トールはスープをすする。
「いっそ、その三文芝居のように、犯人が名乗り出てきてくれれば楽なんだがな」
トールはそうため息まじりに愚痴をこぼした。トールとしてはもちろん本気で言ったわけでもない、冗談のつもりだったのだが。

「そうか、その手があったわね」
「は？」
そんなトールの愚痴に、サイファは何かひらめいたようである。
「その手ってどんな手だ」
トールがいぶかしげに問いかけると。
「犯人に名乗り出てきてもらえばいいのよ」
そう言うと、サイファはにんまりと笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4702r/

呪い屋繁盛記

2011年10月24日23時07分発行